

浄土

monthly JOURNAL

9

2016
September

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



右は天地170ミリ、左右26ミリ、厚みは1ミリに満たない。いずれも数カ所に釘を打つ穴が空いている。描かれた文様はプレスによるものだろうが、線は伸びやかで美しい。

骨董市で見つけた金具である。おそらく、寺院の改修かなにかで廃棄された、装飾を兼ねた接統のための金具だろう。それが業者の手に渡り、骨董市の店先に並べられたと思われる。

描かれた美しい文様に惹かれて買い求めた。買い求めたと言っても一枚わずか一五〇円である。十数枚並べられた金具を手に取り、文様のきれいなものを選んで三枚手にして逡巡していたら、業者が声をかけてきた。

「三枚で四〇〇円にしておくよ」値段で迷っていたわけではない。文様の綺麗なものを探していただけである。しかしありがたい申し出である。私は手にしていた三枚を買うことにした。

蔓と葉、そして花を描いた刻印は手彫りではなく、おそらくプレスだろう。骨董的に値打ちのあるものとは思えないし、時代もそれほど古いものではないだろう。中央のものは、上部に緑青が浮いて美しい色をしている。ところどころに鈍い銅の輝きも見える。

緑青といえば、

私たちは子どもの頃から猛毒だと教えられていた。先日一九九〇年に書かれた古井由吉のエッセイを読んで、緑青にはほとんど毒性がないことを知った。古井は次のように書いている。

「緑青は毒だと教えられた。つい二十五年前の辞典にはまだ有毒とあるが、近年の辞典をひくと、毒性はほとんどない」とある。こちらのほうが正しいのだろう。しかし何だか裏切られたような気がする。緑青を毒だと思えばこそ銅器を大事に取り扱ったのに。緑青そのものをもその毒性ゆえに重々しいもののように眺めたのに」

調べてみると、八〇年代初めに行われた国立衛生試験所の研究結果は、ほぼ無毒との結論に達している。同時に緑青に強い毒性があると言われていたのは、どうやらこの国だけらしい。

私たちが子どもの頃から教え込まれた知識は間違っていたわけだが、その知識なり思い込みを訂正する機会というのはなかなかないものである。

古井のエッセイを読まなければ、緑青に毒性がないことを知らずに、この三枚の銅板もその毒性ゆえにうやうやしく扱い、眺めていたことだろう。

しかし、緑青の緑色を持つ神秘性は、その強いと思ひ込んでいた毒性にこそあるのだとしたら、「知る」ということは少しさみしいことでもあると思わざるをえない。

東京・南千住

浄閑寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



本堂は平成七年に建立された二階建。一階はホールになっている。



恵心僧都作と伝えられる本尊が祀られる内陣と、阿弥陀如来坐像。本尊は焼け残った部分をもとに復元した。





新吉原総霊塔。本堂の裏手に建っている。小さ目の墓が並ぶ中、ひととき目を引く。

新吉原総霊塔にはたくさんのアクセサリが供えられている。



総霊塔に刻まれた花又花酔の川柳。





人気絶頂時に夭逝した三遊亭歌笑師匠の墓。



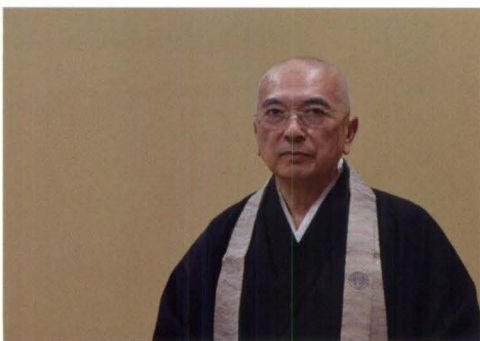
浄閑寺をしばしば訪れた永井荷風の詩碑と筆塚。

浄閑寺の歴史が刻まれている過去帳。



荷風が浄閑寺を訪れるきっかけとなった新比翼塚。

戸松秀明住職。真面目で几帳面な住職らしい住職だ。



浄土

2016/9月号 目 次

カラーグラビア＝寺院紀行 東京 南千住 浄閑寺	写真＝真山剛	1
連載 法然上人のお言葉②⑤	梶村 昇 英訳 河西良治	6
法然上人と親鸞聖人(三)	林田康順	8
寺院紀行 東京 南千住 浄閑寺	真山剛	14
連載 響流十方	袖山榮輝	20
連載小説 渡辺海旭⑦①	前田和男	24
連載 江戸の川を歩く⑥	森 清鑑	28
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	32
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろろう	35
編集後記		36



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 表紙写真＝鬼海弘雄
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

法然上人の お言葉

ご法語

がくしゅうこつ
学生骨になりて、念仏やうしなわんずらん。

(つねに仰せられける御詞)。

現代語訳―学者ぶって念仏の議論をしていると、念仏を称えることを見失ってしまつのではないか。

Honen Shonin's Sayings

If they confine themselves to discussing the nembutsu considering themselves scholars called “gakusho”, won't they have forgotten to say a prayer to Amida Buddha?

(The Words Honen Always Said)

解説

当時、大寺や大学寮などで学問をしている僧侶を学生がくしゅうと呼んでおりました。骨こには、人がらとか気質という意味がありますので、あまり良い訳ではありませんが、「学生骨がくしゅうこになりて」を「学者ぶつて」と訳してみました。

念仏の教えというものは、心から念仏を申せば、阿弥陀仏がその人を極楽浄土に掬いとつてくださるということ、それが教えのすべてです。ところがこれでは他の教えに比べ、簡単過ぎるというのでしょうか、それこそ「学生骨」になって、いろいろな教えを言い始めました。そのうちにその理論が、浄土教の中心のようになって、肝心な念仏を申すことが見失われ始めました。法然上人はそれを戒めて、こう述べたのだと思います。人間というものは、どうも理屈が好きなようです。

Commentary

In those days, priests who pursued learning in large Buddhist temples or universities were called “gakusho”. “Kotsu” in the original text means a character or temperament, and, though it is not so good modern Japanese, I translated “gakusho kotsu ni narite” into “gakusha butte”, which is translated into “considering themselves scholars called “gakusho” in English.

The doctrine of the nembutsu proclaimed that if people recited the nembutsu wholeheartedly, Amida Buddha saved them for their rebirth in the Pure Land. That was all there was to it. However, they may have considered it to be too simple, compared with other doctrines, and they, just like “gakusho kotsu”, began to expound various teachings about it. In a little while those teachings seemed to become main in the Pure Land Buddhism and, consequently, its essential practice of uttering the nembutsu began to get lost. I think that was why Honen said the words quoted above to warn them against it. I am inclined to think that humans are theoretically minded.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人 と親鸞聖人

【連載三 師への思い①】

林田 康順
(大正大学教授)

師への思い

平成二十年四月時点に刊行されていた八社一〇冊の高校倫理の教科書記述の実際をありのままにお伝えしました。すべての教科書に「親鸞聖人は、法然上人の教えを徹底した、発展させた」といった主旨の内容が記載されていた事実をご理解いただけたと思います。そもそも本連載は、こうした一方的、かつ、偏った内容の教科書記述を是正し、両祖師をめぐる記述が正確かつ平等な内容になってもらうべく、法然・親鸞両祖師の教えの肝要を一人でも多くの方に伝えることを目指しています。

ところが、半世紀以上もの長きにわたり、「親鸞聖人は、法然上人の教えを徹底した」などという教科書記述がまかり通っていたため、これまでの教科書の記述内容こそ正當なものであると受け止めている方からすれば、こうした連載そのものに大きな違和感を抱いてしまうものです。その一例が「親鸞聖人は、どこまでも法然上人の教えの継承を目指し

ていたのであって、師弟の仲を隔てるような試みは不必要ではないか」という見方です。

しかし、法然上人と親鸞聖人を宗祖とする浄土宗教団と真宗教団が、およそ八百年にわたってそれぞれの歴史を積み重ねてきたことから明らかなように、両祖師の教えには、根本的な部分において、大きな相違を見出せます。もちろん筆者は、親鸞聖人の法然上人への敬虔な思いを軽んずる意図など微塵もありません。そこで、両祖師の教えの根本的な相違について語り始める前に、親鸞聖人が法然上人を尊ばれていた姿勢を各種遺文を通じて再確認しておきたいと思います。

「往生必定すべし」

まずご紹介するのは、文応元（一二六〇）年十一月、八十八歳になられた親鸞聖人の手になる最晩年の消息の一節です。

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐりたるを御覧じては、「往生必定すべし」とて、笑ませたまひしをみまゐせ候ひき。（『親鸞聖人御消息一六』『浄土真宗聖典（註釈版）』（以下、真宗聖典）七七二頁）

（試訳 私、親鸞は、浄土往生された法然上人が「浄土宗の教えに帰依した人は、愚者の自覚を抱えてこそ浄土往生が叶います」と折にふれて仰っていたことを、確かに拝聴しておりました。そうした中、法然上人は、物覚えの悪い、浅ましき人々が、救いを求めて吉水の草庵を訪ねて来る姿をご覧になられては、「あの者達の浄土往生は間違いないのう」と仰って、微笑んでおられたお姿を拝見しておりました。）

京都東山、法然上人の吉水の草庵には、次から次へと多くの人々が訪ねて来られ、口々に次のような主旨の質問を法然上人に投げかけていたことでしょう。「私のような一文不知の者には教えの細かい理解など到底叶いません。しかし、とにもかくにも法然上人の仰せのままに、ただひたすらお念仏を相續しております。はたしてこれでよろしいのでしょうか」と。そうした方々に対して法然上人は「そうそう、それでよろしいのですよ。お念仏さえ手放さなければ、必ず浄土往生は叶いますよ」とやさしくお答えになられたことでしょう。そして、そうした方々を見送る際、「あのような方々こそ浄土往生は間違いないことよ」と、微笑みながら、弟子達に語りかけていたのです。

「往生はいかがあらんずらん」

親鸞聖人の消息は続きます。

文沙汰して、さかさかしきひとのまゐりたるをば、「往生はいかがあらんずらん」と、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまでおもひあはせられ候ふなり。〔前同〕『真

宗聖典』七七一頁

（試訳 その一方、浄土往生の是非を定めようと経論の文言を取り上げてあれこれと論じ、いかにも賢そうに振る舞う人がやって来る度に「果たしてあの者達の浄土往生は大丈夫だろうか」と心配されていたお言葉も確かに承りました。そうしたお師匠さまのお姿やお声は今に至るまで脳裏を離れることはありません。）

続けて親鸞聖人は、先程とは対照的な方と法然上人とのやりとりを伝えられます。今度は、いかにも賢そうに振る舞っている人が法然上人を訪ねて質問されます。いや、消息の

流れからいうと「質問攻めをする」といった雰囲気でしょうか。それは、次のような様子だったかも知れません。「いささか私が学びましたところ、『華嚴經』にはこのように書いてありました。『法華經』にはこういった趣旨が説かれておりました。『般若經』には…。これらの經典や論書のさまざまな説示と、過日、法然上人から説示された《浄土三部經》の教えとは、どうも整合性に欠ける点が見受けられます。仏教とはみな釈尊の教えであり、究極のところはみな同じはずです。こうした細かい相違をどのように受け止めればよろしいでしょうか」といった具合です。もちろん法然上人は、こうした方からの矢継ぎ早の質問に対しても、懇切丁寧に対応されたことでしょう。とはいえ、その方を見送りながら、法然上人は次のようにポツリとつぶやかれたのです。「うーん、はたしてあの方の浄土往生は大丈夫だろうか」と。

親鸞聖人は、法然上人を慕い、お念仏の教えを請い、救いを求めて吉水の草庵に集う数知れない方々と法然上人とのこうしたやりとりを終生忘れることはなかったのです。

愚者の自覚

言うまでもなく、「愚者の自覚（還愚）」こそ浄土宗の教えの出発点に他なりません。法然上人は『三心料簡および御法語』の中で次のようにお示しです。

無智を本となす事。およそ、聖道門は智慧を極めて生死を離れ、浄土門は愚癡に還りて極楽に生ず。所以は、聖道門に趣く時、智慧を瑩き、禁戒を守り、心性を浄むるをもつて宗となす。然るを浄土門に入る日、智慧をも愚まず、戒行をも護らず、心器をも調えず、只々甲斐無く無智者と成るならば、本願を愚みて往生を願うなり。…源空

が念仏申すも一文不通の男女に齊しうして申すぞ、全く年来修学したる智慧をば一分も憑まざるなり。

〔試訳 本来、無智の者こそが救いの対象であることについて。 そもそも、聖道門

とは智慧を究めることによってこの生死を繰り返す迷いの世界を離れる教えであり、浄土門とはものの道理に暗い愚かな身であると自省して極楽浄土に生まれる教えです。なぜなら、聖道門を歩むのであれば、智慧を磨き、戒律を守り、心の本性を淨めることをその旨とします。ところが、浄土門を歩むには、智慧を頼りにせずとも、戒律を守れなくとも、心身を整える禪定をことさら修められなくとも、ただただ取るに足らない愚か者であると自省して、阿弥陀仏の本願にすがって浄土往生を願うのです。：私、源空が念仏を称えるのも、一文字も知らないような人々と同じ心持ちで称えるのであって、これまで修め学んできた知識など、ほんの少しも頼りにはしていないのです。〕

ここで法然上人は、戒律・禪定・智慧の三学を円かに修めることができなくとも、常に愚者の自覚を抱いて、ただひたすら念仏を相續することこそ肝要であるとお示しです。ここで引用した説示は、『浄土宗大意』『信空上人伝説の詞』『禪勝房に示されける御詞』など、複数の遺文に伝承され、こうした趣旨のご法語は数え切れない程伝わっています。親鸞聖人も、法然上人から、こうしたお言葉を直接かつ幾たびも拝聴していたことでしょう。

五十年を隔てても

親鸞聖人は、承安三（一一七三）年四月一日、日野有範の長子として生まれました。九

歳の時、青蓮院^{しょうれんいん}で慈円を戒師として出家し、比叡山に登りました。比叡山では常行三昧堂の堂僧として不断念仏を修め、天台の教義を学んでいました。

建仁元（一二〇一）年、二十九歳の時、京都六角堂に百日間参籠^{さんろう}し、自己の救済を願っていたところ、九十五日目の早暁、聖徳太子の夢告を受け、東山吉水の法然上人の草庵を訪ねることになります。法然上人が六十九歳の時でした。親鸞聖人は、直ちに法然上人に帰依し、弟子となりました。親鸞聖人は師との出会いを次の和讃に託しています。

真の知識にあふことは かたきがなかになほかたし

〔高僧和讃 源空讃〕『真宗聖典』五九七頁

法然上人のようなお方、つまり、本当の善知識にお会いすることができるのは「難中の難」に他なりません。今、それが叶いました、とその喜びを吐露されているのです。親鸞聖人は、六年間、法然上人の下でお念仏の教えの修学に励まれます。

しかし、建永二（一二〇七）年、法難に遭遇した専修念仏教団において、七十五歳の法然上人は讃岐へ、三十五歳の親鸞聖人は越後へ、それぞれ配流されてしまいます。その後、師匠と弟子が再会を果たすことはありませんでした。

最晩年を迎えた親鸞聖人は、五十年以上を隔てても、吉水の草庵に集う方々と法然上人とのやりとりの様子を、まるで昨日のここのように振り返り、実に生き生きと消息に認められたのです。私達は、親鸞聖人が遺されたこうした消息を通じて、親鸞聖人が終生、師法然上人を心から慕っていた様子を知ることができるのです。

（続く）

寺院紀行

東京・南千住

浄閑寺

文・撮影／真山剛



台東区と荒川区の区境に建つ浄閑寺。
住所は荒川区南千住になる。

「最近は男性の団体が増えました。史跡やお寺巡りをされる方の中には良く調べている引率者もいらっしやいますが、なかには法要中だというのにここぞとばかり大きな声で説明され、注意することも。ときには100人を超える団体も来ます」

とは、三ノ輪の浄閑寺寺務担当者の話。

このお寺、こうした団体はもちろん、個人のお参りや墓地巡りの見学者が三百六十五日、それこそひっきりなしに訪れる。

三ノ輪浄閑寺と聞いてピンとこなくても、投込寺なげこみでらと聞けば、「ああ、聞いたことある」という方が多いだろう。

東京台東区の主要道路、日光街道と明治通りの交じわる三ノ輪の交差点、別名大関横丁。その交差点を千住大橋へ向かい一本目を右に入った道路、右手が台東区で左手が荒川区。この区境の荒川区側、南千住に伽藍を構えるのが、栄法山清光院浄閑寺である。

投込寺のいわれは、一般には江戸時代に亡

くなった身寄りの無い遊女が投げ込まれるからというものだ。遊女が投げ込まれるという理由で投込寺と呼ぶのなら、実は江戸には数え切れないぐらいの投込寺があった。もちろんそうしたかつての投込寺だった寺もその多くは今はそうした歴史や面影を残していない。そうした中、平成の現在も投込寺の通称で世に知られているのがこの浄閑寺で、一六五五年の創建から現在までに投げ込まれた遺体は約二万五千体。しかし全部が遊女の骸みせではなく、火事や地震で亡くなった方々の遺体も多く、実はこうしたことから現在も投込寺と呼ばれているのである。

さて、投げ込まれた遊女はやむを得ない事情で新吉原遊郭に身を埋めた身寄りの無い十代後半から二十代後半の女性たちだが、その新吉原遊郭の跡には今はソーブランドが立ち並んでいる。新吉原とは、かつては現在の人形町辺りにあった吉原が移転してきたもので、その吉原遊郭を造ったのが庄司甚右衛門で、



門前を通る多くの人々が足を止め、山門脇にたたずむこの小夜衣供養地像に手を合わせる。

吉原遊郭造成にあたり、以下の三カ条を約束事として幕府に許可を求めた。

一 引負横領之事。

一 一人を勾引拵養子娘之事。

一 諸浪人悪党拵欠落者（原文ママ）の事。

第一条は、遊女遊びに夢中になり、仕事を疎かにする者や遊興費用欲しさに引負（使い込み）や横領をする遊客を防ぐために、一日一夜以外の長逗留はさせない、こと。

第二条は、遊女にする目的で養女にする者や人勾引（かどわかし）をして遊女奉公に出す者について、傾城屋で吟味して訴える、こと。

第三条は、浪人や悪党などが隠れ場として傾城屋に逗留することが多く、傾城屋が集合すればこうした探索も容易になるうえ、傾城屋も協力をして怪しい者は訴える、こと。

という内容だった。これに対し幕府は吟味すると言いつつ放置していたが、二度目の遊廓設置願いに応え、元和三（一六一七）年三月、以下の五ヶ条の条件のもと許可した。

一 傾城町之外、傾城屋商売いたすべからず。

傾城町囲いの外何方より雇来候共先々之けいせい遣候事、向後一切停止たるべき事。

一 けいせい買遊び候もの、一日一夜より長留いたす間敷事。

一 けいせいの衣類総縫金銀の摺箔等一切着させ申間敷候事。何地にても紺屋染を用ひ可申事。

一 けいせい町家作普請等美麗に致すべからず。町役等は江戸町の格式の通急度相勤可申事。

一 武士、商人体の者に不限、出所慥ならず不審成者致徘徊候はゞ住所致吟味、弥不審に相見候はゞ奉行所え訴可出事。

第一条にあるように、遊廓以外での傾城屋商売は一切禁止され、遊廓は囲い込まれ、遊女はその囲いの外には出られなくなった。

実際の開業は翌年十一月だが、それまで江戸市中にいくつかあった傾城屋が集められ、



老舗の角海老が建立した遊女若紫の墓。遊女個人の墓は珍しい。

ここに幕府公認の遊廓が現在の人形町辺りに造られた。そして、ここに囲われる遊女は公認の遊女として認知され、昭和三十三年（一九五八）年の赤線廃止まで、三百四十余年続いた公娼制度が始まることとなった。

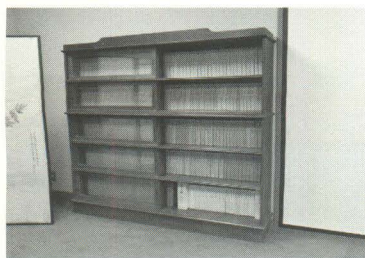
この甚右衛門と幕府のやりとりを読んで気付かれた方も多いだが、幕府が遊廓を許可した背景には、当時の江戸ならではの状況がある。

徳川家康が豊臣秀吉によって移封された頃の江戸は、関東平野を暴れまわっていた利根川や荒川が流れ込む湿地帯。太田道灌が築いた江戸城があったものの、城の目と鼻の先は東京湾で、今の日比谷はかつての入江につけられた地名だった。余談だが、浄土宗の大本山増上寺も三門から大門へと延びた参道の先も海で、現在の浜松町駅から向こうは海だった。落語の「芝浜」、増上寺梵鐘が木更津まで響き渡っていたという話をご存じの方には説明不要だろう。

さて、天下統一した暁にはこの江戸に幕府を置こうとしていた家康は江戸の町造りに大いに励んだ。利根川の流れを変え、海を埋め立て、町並みを整備する。そのために、土木仕事や大工仕事に従事する男たちが、家康の郷里をはじめ北関東や全国から集まってくる。瞬く間に、江戸市中は単身で乗り込んでくる職人や商人の男衆で溢れかえることになる。

当時はある程度経済的にも自立できる30代半ばでようやく女房をもらえたら御の字という時代、結婚できない男も少なくなかったという。となると、「飲食男女は人の大欲」の諺通り、食欲と性欲が問題となる。食べ物はいから運び込めは済むが、性欲はそうはいかない。行き場のない性欲が犯罪を生まないようにする場所が江戸市中にどうしても必要となったのである。甚右衛門もそこに目を付けたのだ。

だが、その吉原は明暦三（一六五七）年の「明暦の大火」で焼失、現在の千束に移転し



二代前の住職が設立した大東出版で発行した『國訳一切大藏經』。

新吉原となるのだが、この新吉原移転の二年
前、明暦元（一六五五）年に創建されたのが、
浄閑寺である。

開山上人は天蓮社晴譽順波和尚。恵心僧都
作と伝えられる阿弥陀如来坐像を本尊とし、
多くの史跡や墓所が並ぶ名刹である。ホーム
ページを開くとそうした数々の史跡や墓所、
そして投込寺浄閑寺として取材された雑誌や
テレビ番組が出てくる。

現在は第二十六世戸松秀明住職がこの寺を
護られている。長身、男前の住職である。

「当山では毎年四月三十日に永井荷風先生を
偲ぶ荷風忌を行っています。正當日の法要
と記念講演に百二十名ぐらいの方が参拝され
ます。永井壮吉こと荷風先生はしばしば当寺
を訪れられ、新吉原総霊塔のあるこの寺に自
分が埋葬されることを望んでいました。その
望みは叶いませんでしたが、亡くなられてか
ら四年後の昭和三十八年に、先生の詩碑と筆
塚が新吉原総霊塔の前に建立されました」

永井荷風の作品に投込寺こと浄閑寺はしば
しば登場する。新吉原や浄閑寺周辺の、今で
は想像もつかない大正、昭和時代の風景を知
るには荷風の作品は最良の教科書に違いな
い。その荷風が浄閑寺に惹きつけられるきつ
かけとなった新比翼塚もやはり遊女がらみの
史跡で、明治時代に情死した遊女と内務省役
人の追善供養に建立された塚である。

その新比翼塚は、自分の身体の悪い部分と
同じ所を撫でると良くなると最近とみに評判
の小夜衣供養地藏尊のある山門をくぐるとす
ぐ左手に建っている。そしてその正面二階建
ての本堂右手前には十年前に造られた永代合
祀供養塔。その横を過ぎ、本堂前の左手から
墓地に入るとすぐ右手に、昔も今も新吉原を
代表する老舗の「角海老」が建立した、遊女、
若紫が一人で眠る墓がある。

左手奥には白井権八に兄弟共々討たれた本
庄兄弟の首塚と首洗いの井戸があるが、右手
本堂に沿って進んだ最初の角には武者小路実

広い書院が三間続いている。



篤揮毫の三遊亭歌笑の墓がある。そこを右手に曲がると本堂裏に新吉原総霊塔が聳えている。現在の塔は昭和四年に改修されたもので、以前の供養塚からその形も名前も改められたという。

その昔は本堂に穴が掘られていて、そこに遺体が投げ込まれていたというが、安政二（一八五五）年の大地震の際に亡くなった新吉原の遊女がたくさん投げ込まれたことから、投込寺と呼ばれたと浄閑寺のホームページにある。その後も大正の大震災、昭和の空襲などで亡くなった身寄りのない方々もこの浄閑寺に多く葬られているという。さて、境内散策を続けよう。この総霊塔には花又花酔の有名な川柳、

生まれては苦界 死しては浄閑寺
の句が彫られている。

その総霊塔の正面に永井荷風の詩碑と筆塚。隣には昭和五十九年、先代住職の代に山谷労友会が建立した日雇い労働者のためのひ

まわり地蔵が微笑んでいる。

こうしてみると、身寄りの無い遊女から、天災や戦争、生活苦で亡くなった人など本当に多くの方々がこの浄閑寺には眠っている。

浄土宗を開宗した法然上人が遊女に極楽往生を説き、救った話は有名だが、浄閑寺は法然上人の、誰でも往生できるという教えを思いつき出させてくれる。

「投込寺としての歴史を大切に護っていきながらも、私は坦々と法務を務めさせていただけでなくに徹するようにしています。今でも一年に一度ですが、新吉原に向いて亡くなられた方々の為に、浄閑寺住職として読経させていただいていますが、時代が変わってもこうした縁が続いているのは有難いことですね」と戸松住職は静かに語る。

住職の話が終わらないうちに、玄関が開き、朱印を授かりたいという人がまた一人入ってきた。

（ルポライター）



鎌倉時代の板碑が残っている。

聖者は「他人と自分を比べて」同程度の者たちのなかにいるとか、劣った者たちのなかにいるとか、勝れた者たちのなかにいるとか、説かないものだ。そういう者の心は穏やかに静まり、物惜しみすることから離れる。「がつがつと」奪い取ることなく、「もういいやと」投げ捨てることもない。釈尊『スッタニパータ』第九五四偈 試訳

この時期になると思い出すことがある。十年ほど前のことである。一時期、妻がアゲハチョウの飼育に凝っていた。まず卵の採取から始まる。アゲハチョウは山椒やカラタチの葉に卵を産み付ける。カラタチはトゲトゲしているし、そうした植物の臭いを他の昆虫や鳥たちが嫌うのだろうか。だとすれば、ここに産卵するのも頷ける。

妻は拙寺中庭に生えている山椒の葉から卵を見つけ出す。枝葉ごと切り取り、適当な瓶に挿^さして卵が幼虫になるのを待つ。蝶をこよなく愛でる人を「蝶族」と称するらしい。蝶族の目的の一つに、疵^{きず}一つない完璧な姿の蝶をコレクションすることが挙げられるという。蛹^{さなぎ}から脱皮して羽を広げ終えたところが完璧な姿なのだそう。もともと妻が蝶族に値するかどうか、私には分からない。妻は、その時をビデオに撮り、写真に撮ってコレクションする。そのために、卵を採取して幼虫になるのを待ち、蛹になるまで育て上げ、孵化^{ふか}するその時を待つ。夏から秋にかけては食欲旺盛な幼虫の世話をし、蛹にして越冬させ、春、孵化を促す。趣味とはいえ、結構な大仕事だ。そうして、ようやくアゲハの姿を撮り納め、やがてそのアゲハたちを春の空に放つ。夫としても感慨深い光景である。

ある年、一羽の蝶の孵化にアクシデントが生じた。蝶は孵化すると羽を広げる空間を求めて移動する。妻はそれを見越して予め環境を整えるのだが、そのアゲハは妻の予想より早く孵化してしまったのだ。狭い飼育箱の中で羽を広げる場所を確保できないでいたアゲハは、妻が気付いた時にはもう、羽が開かぬまま固まっていた。このアゲハは一度も空を飛ぶことなく一生を終える。

春とはいえ我が信州は、蝶を放つには寒過ぎる。だからこそ少しでも孵化を遅らせようと、妻は飼育箱の蛹たちを、あえて温度の低い物置で越冬させていた。それだけにアゲハの孵化は予想外であつたらしい。

妻はそのアゲハを飼育した。飛べないアゲハは暖房が効いている私たちの居間に放たれた。カーテンにつかまらせ自由にさせた。餌は脱脂綿に砂糖水を浸し、アゲハをつかまえ吸わせようとした。何度も羽を掴むうち、鱗粉がすっかり落ちてしまった。それでも娘が着ているセーターにつかまらせ写真を撮ったりもした。妻は十分に世話をしたと思う。どのくらいの日数が経ったであろうか、アゲハの命は尽き果てた。私たち家族で庭に埋め、線香を手向けた。

この頃、葉室隣の小説『秋月記』を読んだ。「山は山であることを迷い、疑う」「お雲は雲であることを疑わぬ。ひとだけが、おのれであることを迷い、疑う」「お

のれがおのれであることにためらうな」とあつた。

山は雲を見て、遠いところまで行けて羨ましいとか、さっさと消えてしまうのは惨めなざまだとは思わない。雲は雲で雄大な山と自分を見比べるようなことはしない、ということだろうか。

釈尊は他人と自分を比べないのが聖者であると説いた。比べないからこそ羨むことなく貪らず心が穏やかになり、比べないからこそ卑屈にならず自分を投げ出すこともない。あのアゲハは自分と他のアゲハと見比べていただろうか。「おのれがおのれであること」にためらっていただろうか。ただひたすらに生きていただけではないだろうか。私は飛べないアゲハをかわいそうに思っていた。しかし、そう思うのは私が勝手に他のアゲハと見比べ優劣を推量おしはかろうとしたからだ。そのこと自体、アゲハには余計な事であつただろう。

あれから家人はアゲハの飼育から遠ざかっている。もつとも今は、つがいから増やしたキンカ鳥たちや、箱入り娘のようなウサギの世話で忙しい。相変わらずである。

(袖山榮輝)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第七十一回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

仏教壁画切り取り男との出会い ③



唐風 壁画は発掘の価値なし!

渡辺海旭は、ロイマン教授の名代として、ドイツ探検隊が中央アジアから持ち帰った歴史的文献を求めて、探検家ル・コックを訪ねたが、相手は、仏教壁画切り取り男の異名をとるだけあって、噂にたがわない変わり者だった。

ベルリンへ向かう途次、海旭の頭に去来した、ル・コックは石山本願寺を焼き討ちした織田信長で、自分はそれを迎え撃つ顕如か——の気分そのままの対峙となった。

菩薩の顔が真正面から切り取られた壁画を自慢げに案内された海旭は言葉を失い「この男とは席は同じくしたくない」とさえ感じた。しかし、それから数分もたたないうちに、その拒絶感は消え失せていった。

それは、壁画に描かれた仏陀とおぼしき顔を指さして、ル・コックが発した次の言葉がきっかけだった。「いかにも西洋的な風貌と

思わんか?」

海旭が頷くのを認めると、探検家はつづけた。「だが、現地でわれわれが発見したすべての壁画がこうではなかった」

海旭が訝しげに首を傾げるのを横目で見ながら、ベルリンの信長はさらに言葉を継いだ。「実は中国風の風貌をもつ仏画も多々あった」海旭が俄かに興味を覚えて身を乗り出すと、ル・コックは待っていましたとばかりに声音のトーンを上げた。「理由を知りたいかね。それは、グリウンヴェーデル隊長殿の意にそわないからさ」

それだけでは海旭には理解も判断もできず、とりあえず副隊長殿の長広舌に耳を傾けることにした。

それは、おおむね次のような内容だった。

「ヘレニズム東漸説」と黄禍論

ヨーロッパでは、海旭が留学をする数年ほど前から、オリエント学が俄かに脚光を浴び

つつあったが、いうまでもなくそれは各国が探検と発掘を競いあった中央アジアの文化遺産に負っていた。それによって活気づいたのは、オリエント学の主流の「ヘレニズム東漸説」である。すなわち、ギリシアに発する西欧文明がいかに優れていて、それが遅れていた東方世界の文明的開化をいかに促したかという学問的な文脈であり、数度にわたる探検隊の隊長をつとめベルリン民俗博物館館長でもあるグリウンヴェーデルは、その守護とでもいふべき立場にあった。したがって、シルクロードの壁画に描かれた仏陀や高僧たちが、鼻が高く碧眼の西欧的風貌であることは、彼が信奉してやまない「ヘレニズム東漸説」の眼にも鮮やかな物証であった。

いっぽうル・コックにいわせると、中国的風貌の壁画も数多くあり、それは「ヘレニズム東漸説」の反証でしかないのです、持ち帰りの対象にはならなかったというのである。

ル・コックは、博物館の上司でもあるグリュ

ンヴェーデルの「ヘレニズム東漸説」を斬って捨てた刀を返すと、続けざまに自説を一気呵成に語った。いわく「東から西へ」——つまり当初は東漸した仏教美術だが、後には東から西への逆流もあった、東西それぞれに特異性と個性をもつ文化文明をもっており両者がまじわる十字路が中央アジアだとする主張である。

西欧文明優位主義には違和感を覚える東洋人として、海旭もこの説には一定の共感を覚えた。そして、ル・コックとグリウンヴェーデルが「犬猿の仲」なのは、「好き嫌い」や「ひがみやそねみ」といった世俗的な要素によるものではなく、東洋学をめぐる学術的立場の違いが背景にあったのだと気づかされた。すると、ル・コックを、神仏を怖れぬ「信長的美術ハンター」とみたのは早計で、「あれもこれも秀吉」「いやいや実は内奥に『利休』を隠し持っているのかもしれないと思直し、しかしそんな「たとえ」を口にしても当

人には理解はしてもらえないだろうなと考
え、思わず苦笑をもらしていた。

しかし、ル・コックの「ヘレニズム東漸説」
批判に思わず反応してしまったのには、もつ
と身近で深刻な理由があった。「ヘレニズム
東漸説」が「白人優位主義」の「黄禍論」と
連動しており、かねて苦々しい思いを抱かさ
れていたからである。

「黄禍論」とは、海旭が籍を置く大学の正式
名称にも冠されているドイツ皇帝ウィルヘル
ム二世が日清戦争の末期から広めはじめたも
ので、黄色人種による白色人種への侵略や征
服——古代のアッチラ王のフン族、中世のモン
ゴル、近代のオスマン・トルコの侵入が現
代に再現されるという恐怖心に拠っていた。

躍進著しい日本も「黄禍」と見なされ、日
露戦争で故国が白人大国を打ち負かしたこと
もあって、海旭も陰に陽に差別的な扱いをう
け、嫌な思いをさせられていた。このままこ
の異郷の地に留まりつづけて大丈夫だろうか

と不安がつのも、冷徹な現実だった。（実
際、この黄禍論は衰えるどころか勢いを増し、
一九二〇年代にはアメリカで猛威をふるい、
やがて日米開戦の一因になったともいわれる）。
黄禍論の不安にしばしとらわれた海旭を、
ル・コックの声音がいきなり襲った。

「次回の探検ではあいつには外れてもらって、
この俺が隊長なってみせる。そこまで待つて
もらえれば、中国様式の壁画をここへもって
きて、東洋人の貴兄にもご覧に入れられるの
に誠に残念だ」

またまたル・コックの中に信長が首をもた
げそうなのを認めて、海旭はあわてて本題を
切り出した。

「ロイマン教授の名代としてここへ伺ったの
は、ぜひともご協力をお願いしたいことがあ
りまして……」と、説明をはじめた。

（つづく）

江戸の川 を歩く

第六回

江戸ウォーカ―

森清鑑

日本橋川

大川（隅田川）、霊岸島の前に数隻の大型船が停泊している。荷を川船に積み替えている。辺りを見回すと、左に霊岸島、右に深川佐賀町、相川町の町並み。眼前に長さ百二十間余の永代橋が聳えている。

橋の上には、大勢の人々が歩く姿。なかには、中央で遠方の景色に見とれている人もいる。西に富士山、北に筑波山、南に箱根連山、東に安房上総が一望できる。

永代橋

永代橋は、元禄十一年（一六九八）、五代綱吉の五十歳を祝して建造された。この橋は、深川房総と江戸中枢部を結ぶ重要な架け橋で、大川河口に浮かぶ、最大級の大橋。その名は、深川佐賀町一帯が、昔、永代島と呼ばれていたところからとか、そこにあつた広大な巨利、永代寺からとった、あるいは、幕府の永代存続を願って建設……などの諸説がある。また、赤穂浪士が吉良上野介の首を掲げて、この橋を渡った逸話で、江戸っ子にとっては、自慢の大橋である。



この橋も長い年月の間に、落橋事故を起こしている。最大の悲劇は、深川富岡八幡宮の祭祀事故。御輿を担いだ大群衆の重みに耐えきれず、落橋。死者一千四百人。事故である。大田南畝の狂歌「永代と かけたる橋は 落ちにけり きようは祭礼 あすは葬礼」。一八〇七年九月の出来事であった。しかし、橋は、すぐに、架設、補強された。

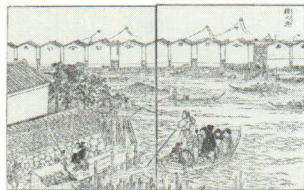
御船手番所

永代橋の西口は直接、御船手番所に繋がっている。ここで荷は改められ、通行税を徴収。番所の右隣に高尾稲荷がある。吉原で最も有名だった、二代目高尾太夫を祭る稲荷である。舟は番所に隣接する、豊海橋を潜る。この辺り、文字通り、日本橋川の河口域。豊岸島新堀に入る。周囲は、船でこつた返している。両岸には、蔵が続き、湊橋に來ると、右手は、箱崎町の家並みに変わる。そこは、広い、川の三叉路。左、豊岸橋（越前堀）。右、崩橋（箱崎町から大川へ）が見える。崩橋を渡ると、行徳河岸。大川（隅田川）、小名木川を経て、行徳に達する、塩運搬ルートの出発点。大勢の人がここに集まり、小名木川の観光ルートを楽しむ。

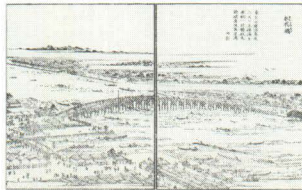
行徳河岸を過ぎると、左手、茅場河岸が広がっている。河岸の向こうには、茅場町の家並みと、与力、同心の家宅が八丁堀まで続いている。河岸の裏手にあるのが、有名な山王旅所。江戸三大祭り、赤坂山王祭には、巨大な山車や御輿がここまで旅する。その行列が凄いい。武士も町民も一緒に、ここまで町中が人で埋まる。

鎧の渡し

茅場河岸の終わりに、有名な「鎧の渡し」がある。川の左右、蔵と蔵の間を、客を乗せた定期便が行き交っている。北斎も広重もこの場を描く。その昔、ここで源頼義が東北遠征の際、暴風に遭い、川は、荒れ狂う。そこで兜を沈め、龍神に祈ると、風雨が止み、無事川を渡れたとの故事にちなむ。いつしか、人々は、この辺りを「鎧が淵」と呼ぶようになった。



◆江戸名所図会 鎧の渡し。客を乗せた舟が対岸の小網町鎧河岸の蔵地に向かう。



◆江戸名所図会 永代橋図 右が深川、左が船番所と日本橋川、豊海橋。

堀留川

鎧の渡しを過ぎると、川幅はさらに広がり、左前方に江戸橋が姿を現す。右に東堀留川が見える。ここに思案橋、親父橋が架かっている。人形町にあった旧吉原遊郭に通う客が、行くか行くまいか、思案をした橋。次の親父橋とは、遊郭を造った、庄司甚右衛門を讃える橋。一六二二年当時、この辺り、一帯は、葦の繁る沼地であった（人形町一帯）。そこからついた名、葭原（吉原）。

江戸橋のすぐ右側に。西堀留川。東西二本の川が並行して北に流れ、行き止まり、コの字を形成している。ここが江戸でも有名な堀留。堀の周囲は、米河岸、材木河岸の賑わい。江戸の米相場はここで決まる。無数といえるほどの小舟がひしめいている。

楓川

江戸橋の左側に、楓川が合流する。この川は、南の八丁堀に繋がっており、両岸には、江戸城をはじめ、江戸の町作りに大きく貢献した、材木問屋がひしめい

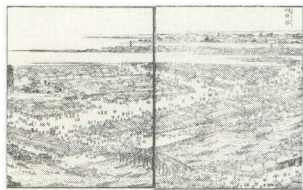
ていた。材木が林立する、材木河岸。深川木場に移るまでここが本拠地で、本材木町一丁八丁目の地名として残る。

日本橋川に無数の船が行き交う、江戸橋を潜ると、左手、木更津河岸。その裏には、江戸橋広小路があり、大勢の人が行き交い、四日市の蔵と家並みが広がる。

日本橋

そして、右手に、魚河岸が見えてくる。ここでは、魚の荷下ろしが絶え間なく続き、威勢の良い競り声が飛び交う。言うまでもなく江戸庶民の台所。初めて江戸に來た異国人もこの光景には、驚嘆。とりわけ、大きな生け簀を見て、驚愕したという。魚は見る間にさばかれ、売られていく。

日本橋については今更言うまでもない。長さ二十七間、全ての幹線道路の起点である。橋の上から、前方一石橋を眺めると、大名屋敷が連なり、江戸城の威風。その背後に富士山が聳えている。なんと絵になる光景。



◆江戸名所図会 四日市の賑わい
下、日本橋川、江戸橋。中央広小路

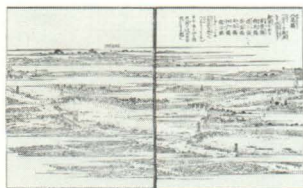
八見橋

一石橋までは、兩岸ともに蔵、蔵、蔵。蔵がずらりと並ぶ。一石橋を抜けると、人々は、もう御堀と呼ぶ。長谷川雪旦の「八見橋」が描き出す、壮観な運河の交差点。左、呉服橋。正面、銭瓶橋から道三堀、右、常磐橋。旧平川の、幾筋もの流れをまとめ、道三堀を掘削し、日本橋川へと繋げた、一五九〇年、家康江戸入府後最初の大工事の現場である。八見橋とは、この近辺の眺望に捉えられる八つの橋で、一石橋、常磐橋、銭瓶橋、道三橋、呉服橋、日本橋、江戸橋、鍛冶橋のこと。文字通り、江戸の中核である。

呉服橋、右常磐橋

日本橋川は、常盤橋を潜り北上。左岸は、城壁で、右手には金座（金貨製造、日本銀行）が見える。ちよつと行くと、右手に龍関橋と細長い龍関川。川を夾み、南が本石町、駿河町（三井越後屋）、北は、鍛冶町、紺屋町などの職人町。正に、江戸町民のメッカである。右、龍関橋から先が有名な鎌倉河岸である。江戸初期、城の建設資材を三浦半島から取り寄せた。その最初の

材木河岸がその名にちなんだ鎌倉河岸である。すなわち江戸にできた最初の河岸といつて良い。ここにできた酒問屋、豊島屋の白酒は、江戸っ子が集まって、あつという間になくなってしまふほどの盛況を見た。さながら、江戸っ子がこぞつて集う広場であつたわけだ。左、城壁を見ながら、ずっと進むと、神田橋御門を潜る。右手、広大な護持院ヶ原の明地。左、城の中は一橋慶喜の本屋敷。一橋御門を潜り、舟をさらに走らせると、右手、明地が終わり、そこに雉子橋。ここから先、日本橋川はぐんと細くなり、飯田川に転じる。ほどなく、九段坂に架かる小さな組橋。川はさらに狭まり、元飯田町堀留となり、大目付、柳生播磨守の居屋敷（幕臣の本邸）のところで本当の堀留となる（明治になって、流路は神田川まで掘削される）。これが、平川流路を替えて造つた運河、江戸の大動脈、日本橋川周辺の光景である。



◆江戸名所図会 八見橋 中央左右日本橋川。左一石橋、右銭瓶橋。交差して左上から右下へ、左呉服橋、右常磐橋



◆広重：日本橋雪晴

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●旅

〔特選〕金魚屋を覗いてゆけり旅の僧

齊田 仁

雲水と言いい行脚僧という。喜捨を乞いながら諸国を巡る修行僧である。いま金魚屋の前に来ると、ふつと金魚を覗いて行つた。金魚のために、そこでの喜捨は忘れて行つたのか。僧と金魚の対比が面白い。

〔佳作〕夏草や旅の一座の女形

水江 彰

旅すれば人みなやさし桐の花

近藤アツ子

うとうとと旅のつかれや夏の風

浜口千賀子

●雨

〔特選〕花柘榴こぼれて雨の法隆寺

三島由布子

寺院のまわりのどこかに柘榴の花が咲いて、少しばかり雨に散っている。その鮮やかな色が作者の目を引いた。花と古い寺院の対比が

よいし、雨で魅力を増した。「雨の法隆寺」は読みの上でもしつとりとして良い。

〈佳作〉 雨の日のスイッチ固き扇風機 月島 志野

海豹の見事な欠伸梅雨に入る 御影 統司

遊歩道耳に染み込む蟬時雨 東 保

●自由題

〈特選〉 蝉しぐれひとりの幅の島の坂

池田 伊吹

離島の道路の狭いのは当然だが、その島の坂道を「ひとりの幅」という。なるほどと納得する。ここで句が締まった。うまいと思う。島中に響くように鳴く蟬との取り合わせも、成功している。

〈佳作〉 母を呼ぶようにアシカの鳴く真昼 月島 志野

ビール抜く魚のかたちの南部鉄 安西由美子

雲の峰人見する子を抱きしめて 井村 善也



友達自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■旅

草いきれ老も若きも旅姿
亡き母と余市美国と泊り旅
あじさいの明るさ溢れ旅半ば
神輿にて現世を巡る旅なりき
旅先の夢蝙蝠になつてゐる
白靴と旅行鞆と文庫本
この旅のはじつこに置く冷奴
独酌や旅荘の網戸から夜風
旅行社の女がくれた白団扇
万緑を旅して谿の水の音

佐藤雅子
飯島英徳
池田伊吹
笹井亜子
袖岡恭子
小林ゆえ
後藤義彦
筒井亮作
安藤陽介
入谷麻衣

締切・二〇一六年九月三十日

発表・『浄土』二〇一六年十月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■雨

なにはとも選挙に行かねば青時雨
青葉雨一山すべて御神体
神島をめつた打ちして梅雨明ける
裸婦像の緑雨をこぼし艶めける
青梅雨の青より青きインコの日
梅雨闇に白フクロウは不動なり
梅雨空にはらわたを出す段ボール
雨よりも雨の色して濃紫陽花
城跡の巨石に生まれ梅雨の蝶
天気雨古刹の崖に半夏生
梅雨晴れて罅の入りし象の泥
有楽町西口に降る夏の雨

佐藤雅子
斉田 仁
浜口佳春
石原 新
小林苑を
長谷川裕
村松芳郎
笹井亜子
東海 満
井口 栞
目黒幸三
渡辺純子

■自由題

雷鳥に煙の戯言聞き逃す
夏の日のかなしく長く象の尿
炎天に尻を並べてどれも象
炊き出しの行列はるか夏木立
大瑠璃や上野の山は死者の山
父の日の父サル山の立ち尽くす
別々の鬼を煽いで団扇かな
犬の名は花火晩夏の橋渡る
陰膳に摘まみ跡あり遠花火
武者震いして炎昼へ一歩出る
我よりも先に浄土に往く佛

佐藤雅子
斉田 仁
横山美英子
井口 栞
内藤隼人
神戸あゆみ
生島啓太
一枝美紀
本庄浩二郎
市川 稔
飯島英徳

さっちゃんねネッ

かまちよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

夏の夜に月も血の気を見失う 岱潤

七月二十六日相模原市津久井にある障がい者施設「やまゆりの園」に、元従業員の方が侵入し、重複障がい者十九人を殺害し、二十六人を負傷した事件が起こった。数々の衝撃的事件の中でも、心が震撼することを感じた事件だ。

植松容疑者は今年二月に衆院議長に手紙を送り、社会福祉の負担を国家の損害とし、障がい者の安楽死を求め、自分が国に替わって重複障がい者を抹殺するから、その行為を容認し事件後の処遇を求めている。そして最後に安倍首相にこの話を伝えてほしいと懇願している。もし

この手紙が現代文の試験に出て、「この作者は安倍首相にどういう思いを持っていたのでしょうか」としたならば、「安倍首相は自分と同じ考えで必ずわかつてもらえる」と確信していた」という答えが出てくるのではないだろうか。

「ナチが突然降りてきた」と語っていたという植松容疑者の言葉通り、彼は精神障がいでも大麻による精神異常でもなく、優生思想に支配された、ネオナチ、思想犯であったといえる。その意味で現政権与党の押し進める現代の社会に、ネオナチを容認する空気があるからと思える。逮捕後の英雄気取りの彼の笑みはそれを物語っている。それを否定するならば、す

ぐにでも政府は優生思想をはっきりと否定する談話を発表すべきであった。この事件の怖さは、ヘイトクライム差別による犯罪であり、現代の社会の空気にによる犯罪であることだ。(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十二巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十八年八月二十日
発行 平成二十八年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 太室了皓

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇〇一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八六九四七

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(日黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※ 寺院名 () を入れる・入れない

※ 関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※ 写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※ 消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※ 1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがある。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品！！

※ ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※ お問い合わせは、Fax またはメール
hounen@jodo.ne.jp へお願いします。